

第7話 伊勢の神宮

きゅうちゅう まつ あまてらす おおみかみ しんれい ほか うつ
 久しく宮中にお祀りしていた天照大神のご神霊を外にお遷して、
 こうきょ じんぐう い せ すいにん み よ ちんざ
 皇居と神宮を別々になされた。今の伊勢に垂仁天皇の御代にご鎮座になった。

すじん けいしん
 崇神天皇がお崩れになった後、父子相継いで8代の天皇が御位につかれて、早くも八十余年が経た
 が、その間には別に伝えるほどの事ありませんでした。ところが、第10代崇神天皇の御代に、こ
 れまで同じ御殿の内にお祀りしていた天照大神の御神霊を外にお遷して、皇居と神宮とを別々に
 されたが、それは次のような事からでした。

崇神天皇の敬神

すじん
 はじめ崇神天皇がご即位になった時には、国内はよく治まり、何事も無く、人々も安心して皆その
 ぎょうむ はげ にわ でんせんびょう は や まくら らな
 業務に励んでいたのですが、間もなく、俄かに伝染病が流行り出した。一家で枕を並べて、親も
 たお しよく うしな
 子も兄弟も皆斃れるというように、死ぬ者が非常に多く、たまたま死なない者も、職を失って生活が
 出来ないで、よんどころなく諸方に流浪するようになったために、強盗だの追剥だのが到る処に出没
 して、世の中は大変物騒になりました。

ありさま らん すじん しんばい いじゅつ ようち じだい こと けいしん
 この有様をご覧になって、崇神天皇は非常に心配されたが、医術の幼稚な時代でしたし、殊に敬神
 み こころ あつ びょうき りゅうこう しかた
 の御心の篤くおわした天皇の事でしたから、この病気の流行をも、何かご自分のお政治の仕方が神々
 とが いちづ おそ つつし
 のお気にいらないことがあって、それをお咎めになっているのでなかろうかと一途にお恐れになり、謹
 まつ ぼくめつ いの や
 んで神々を祭って伝染病の撲滅を祈られたが、それでも中々止まなかったのです。

かみよ た
 天皇はいよいよご心配の末に、これは、すでに神代から数百年の長い年月が経って、神と人との間
 へだた かま や た あめのむらくも つるぎ ごしよ
 が遠く隔ったのに、それにも構わず、天照大神とも見るべき八咫の鏡や天叢雲の剣を同じ御所の中
 しんい けが いか おぼ め
 にお置き申していることが、やがて神威を汚すので、それでお怒りになったのであろうと思し召した。

かさぬいのむら うつ まつ
 ついに御鏡と御剣とを大和の笠縫邑に遷してお祀りになりました。

かさぬいのむら ごしよ はな
 笠縫邑の場所が今のどこかははっきりとは分かりませんが、ともかくも御所を離れたところですか
 まつ こうじょ とよすきいりひめ のみこと
 ら、今までのように天皇がご自身で毎日お祭りすることは出来ないで、皇女の豊鋤入姫命をその
 さいし すべ つかさど たま ため もうれつ
 地にお住ませになり、祭祀の事を全て司らせ給いました。その為でしたか、そしも猛烈だった伝
 おとろ や
 染病も、それからは次第に勢いが衰えて、やがて全く息んでしまいました。

べつ ところ まつ てもと まがたま のこ
 さて、御鏡と御剣とを別の処にお祀りになってしまうと、天皇のお手元には勾玉だけしか残りませ
 あら うつ つく
 ん。そこで天皇は新たに御鏡と御剣の写しをお造らせになり、それを勾玉と合わせて、皇位の御しるし
 とど しゅ じんぎ
 として宮中にお留めになった。これがその後の代々の天皇がご即位の時に受けになる三種の神器です。

伊勢の神宮

かさぬいのむら やしろ あわ た そまつ
 さて、また、笠縫邑のお社は、思いますに、慌ててお建てになったので、恐らくは粗末だったで
 すしょうし、場所としても思わしくもなかったのでしょう。次の第11代垂仁天皇の御代に、皇女の

第7話 伊 勢 の 神 宮

やまとひめ のみこと とよすきいりひめ のみこと

倭 姫 命 が豊 鋤 入 姫 命 に代わってお祭りになることとなりました。

命は大 神の御鎮座になるべき最も好い 処をお探しになろうとして、ご自身で御鏡と御剣とを奉じて、北は京都府の丹波、西は岡山県の備前、南は和歌山県の紀伊、東は岐阜県的美濃、愛知県の尾張に至る間の諸国をあちこちと経めぐりました。

年月を経て、最後に三重県伊勢の五十鈴川の川上に到った時には、山河の景色もよく、神さびた 趣も深い処に出逢いましたので、すなわち、そこを 宮 所と定めて、木を伐り払わせ、草を刈らせ、土地を平らにして、そこに立派な御殿を造り、八咫の鏡を天照大神の御神体として、天 叢 雲 の 剣 を添えておまつ 祀り

になりました。

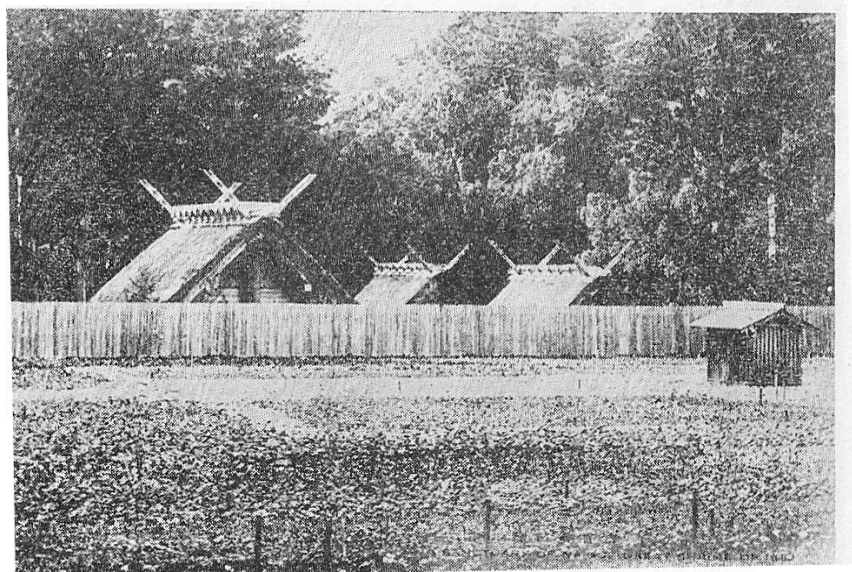
これがすなわち今の皇大神宮であります。 御 剣 は後に尾張の熱田に祀られることとなりましたが、その譯は日本武 尊 の御事蹟を語る時に分ります。

この皇大神宮から1里(約4km)ばかり離れたところに豊受大神宮があります。 初めて稲や麦や豆などの種子を天 照 大 神 に献上して、わが国民の食物の原をお作りになった豊受大神 という五穀の神さまをお祭りし、元は丹波の真名井というところにお 社 がありましたが、第21代雄略天皇の御代に天照大神のお告げがあり、ここにお遷したのです。

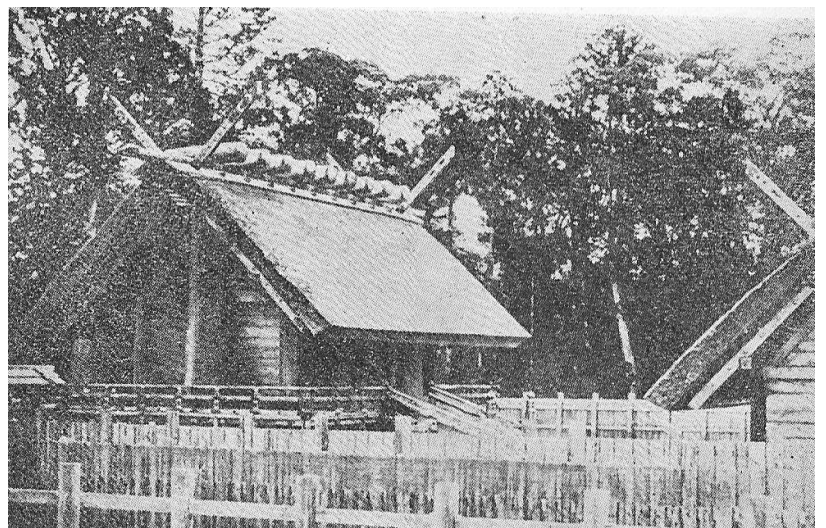
皇大神宮を内宮と 称 するに対して豊受大神宮を外宮と称し、両宮を併せて伊勢神宮と申しています。

神宮の社殿の構造

この神宮の社殿では、20年毎に改築して、御神霊を 隣の新宮にお遷しする定めになっていますから(訳注：最近の遷宮は2016年に行われた)、昔からではもう何十回と改築になったかも知れないが、その構造は必ず元の通りにしますので、今も最初に建った時と少しも変わっていません。 全体が 檜 の



伊勢 皇 大 神 宮 (内 宮)



伊勢 豊 受 大 神 宮 (外 宮)

第7話 伊 勢 の 神 宮

しらきづく やね かや ふ ち ぎ かつおぎ おごそ そび まこと しつそ
白木造りで、屋根は茅で葺いた上に、千木と堅魚木が 厳 かに聳えています。 誠 に質素ですが、どこ
じょうひん こうごう
となく上品で神々しいです。

さいぎょう ほうし もう
昔、平安時代に、西行という法師が詣でた時に、
なにごと し なみだ
何事のおわしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる
よ うなず
と詠んだといいますが、なるほどと頷かれます。

ごてん た ようす そうぞう ゆか
それに、これが大昔の御殿の建て方だったことを思うと、遠い昔の生活の様子も想像されて、一層床
とうと なつ いた
しく、尊くて懐かしい気が致します。

そんけい もっと あつ だいが ごと あら さいぐう
伊勢神宮に対する皇室のご尊敬は最も篤く、昔は天皇の代替わり毎に新たに皇女を祭宮としてお
つか
遣わしになったが、明治以後は、皇族の男の方が祭主におなりになることになった。 又、毎年1月4
さいしゅ
日のお政治始め（現在の仕事始め）には、先づ第一に神宮の事を天皇に奏上してから、他のお政治の事
しごとはじ そうじょう
を奏上することになっています。

じけん みづか さんばい ある ちよくし つか
又、国家に大事件のある時には、天皇自ら神宮にご参拝になるか、或いは勅使をお遣わしになっ
しだい ほうこく れい したが むすう じんじゃ
て、事の次第をご奉告なさる例になっています。 従って、一般の国民も、無数にある日本の神社の
あが うやま へんび い せまい
中で、最も神宮を崇め敬って、どんな辺鄙な処にいる者でも、「一生に一度は是非お伊勢参りをしたい」
はげ まいにちはたら
と言って、それを励みに毎日働いているくらいです。

- じんむ すいせい あんねい いたく こうしょう こうあん
(1) 神武天皇—(2) 綏靖天皇—(3) 安寧天皇—(4) 懿徳天皇—(5) 孝昭天皇—(6) 孝安天皇—
こうれい こうげん かいが すじん すいにん
(7) 孝靈天皇—(8) 孝元天皇—(9) 開化天皇—(10) 崇神天皇—(11) 垂仁天皇

い せ じんぐう とうい しんこう
(第7話 伊勢の神宮 終わり。 次は前頁に戻り、 第8話 皇威の振興 へ)